

# 京鹿子

昭和二十三年九月三日第三種郵便物認可  
平成二十一年七月一日発行  
通巻一〇七号(毎月一回一日発行)



7月号

夏期吟旅特集

母の日  
丸山佳子

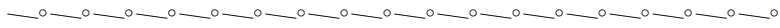
恙  
が  
な  
く  
日  
進  
月  
歩  
髪  
洗  
ふ

母  
の  
日  
や  
国  
籍  
不  
明  
の  
花  
も  
ふ  
え

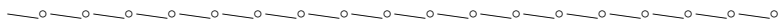
浮  
く  
葉  
に  
も  
時  
間  
平  
等  
つ  
ば  
め  
来  
る

公  
演  
ハ  
ツ  
ピ  
ー  
新  
語  
俗  
語  
の  
春  
落  
葉





残雪やささはらぬ神に崇りなし  
合戦あと平成たんぽぽ万の黄に  
この岩に対面久しほととぎす  
「日の丸旗」機械に豪農お田植日  
半夏生庭に一睡なき陶狸  
つくし萌え一寸先の不安消ゆ



豊田都峰

清響集 その八十七

花すぎの雨あをあと禅寺なる  
入門す常盤木落葉に肩うたる  
青楓雫もあをき禅なる偈  
阿修羅には秘めたる花でありにけり  
仏頭は花のおぼろの芯めきて  
花過ぎのまんだら界はちりもなし





## 秀華採集

そのうちと些事をためこむ葱坊主

寺坂 八重子

季語によって左右される作り方であるが、この場合、「葱坊主」がたいへん効果的である。球状の花房が一つの結果としての在り方を示して象徴的。

諸葛菜空に五寸の色足せり

西村 摩耶子

古本屋の奥の暗闇花の昼

畑 佳与

前句のポイントは「五寸の色」、後句は季語のあしらい方を評価したい。

鈴鹿 仁

飛鳥吟旅五句

一度打つ鐘の功德やみどり風  
雨蛙跳んで飛鳥の史をたどる  
つばめ舞ふ家紋守りし大和棟  
緑さす道二すぢの二面石  
日唐傘いにしへ人の夢たたむ  
草笛にあの山この木ふくれたす  
草笛の遠くへ吹けば夕日燃ゆ

近 詠

宇都宮滴水

河童忌

河童忌や切符啞へて手を余す  
割り箸を割りても四角青すだれ  
蚩火を草に還して一善めく  
草矢射り水平の野を怒らしむ  
もの言ひの付きて蜥蜴は尾をとどむ  
ぶつきら棒な紺のひという茄子の花  
うしろより呼ばれ晩夏の人となる

(句集「蘆の角」より)

神麓集



梨花 禰寝瓶史  
五七調 乱し山鳩霞詠む  
米躑躅 飢餓感うする戦中派  
天文学 知らぬ存ぜぬ夜の百合  
梨花へ 径外れ金網に囲まれる  
梨花守りの雲量ゼロの目が若し

追悼高尾敏夫氏 高木 智

丹波路の主を失ひ 冴返る  
雛あられ 砕きて雀どもを呼ぶ  
葉桜や 自覚症状なき死病  
癌転移してをり茶摘始まれり  
菖蒲湯の穂先病巢在るあたり

山田をがたま

予報それ 淡き春めく日ざしなり  
北へ馳す 鉄路沿線花三分一  
若狭路は まだ冬景色彩乏し  
米寿の夫と 駅弁一個で足るのどけし  
露天湯の 組石に依る雪柳

ひとり鍋 北川孝子  
水割りの 酔ひかすかにも雪解霧  
加齢てふ むつかしきもの水温む  
春めきし 水曜花の特売日  
啓蟄の 豆腐ふるふるひとり鍋  
尼さまの 御手ほはほはとさくら冷え

駅家跡 川崎光一郎

山笑ふ 田畑ひろが 駅家跡  
真直ぐて ふ古代山陽道おぼろ  
囀のリズムが 誘ふ睡気かな  
古代遺跡 春の陽宿す 潦  
若草の 杭方形に 駅家跡

過客のかげ 荻野千枝

初桜夢の ひらきし日の遠く  
犬ふぐり 影を彩る 駅家あと  
つくつくし 昔の過客の 悌ならむ  
ささやきは 彩をうつせる 春の水  
青き踏む 過客の 跫音蹄の音



神麓集



四月は急に淋しい 松平 菩提子  
灯を消して椅子一つ浮く雪あかり  
椿落つ天と向き合ふはじめなり  
指揮棒の先へ死にゆく春心  
見えぬふりして行かしゃんせ獺祭  
累卵の果ての砂やと防風摘む

花大根 柴田 朱美

生きたをやはらかくして花大根  
いつも何処かが醒めてゐる母花大根  
牧師にも微罪のありて花大根  
会葬の末席にをり花大根  
諸葛菜母の秘薬は白で碾く

奈良御所の復元近し 奥村 鷹尾

春宵や老の一睡夜も更くる  
御所再現都跡をに春の瑞し雲  
朱雀門吹き抜け御所地風薫る  
乾からびし去年の毛虫の風に散り  
時じくの納めの雪に投げ言葉

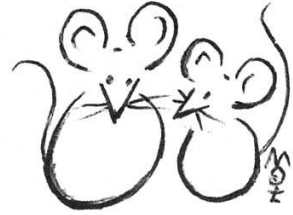
白酒に重ね袂の横座り  
若草に居寝て希望天へ吐く  
目刺焼く香が何処より吉田山  
焼目刺好物の内魚嫌ひ  
臘梅の香が何処より吉田山

花菜雨 船越 美喜

花菜雨令を高目にさして行く  
紅枝垂れ触れし指先胸に引く  
長きより短きがよし亀の鳴く  
盛付けは九谷の小鉢木の芽和  
花冷えの近江に逝きし人悼む

伊藤 希眸

白詰草いたづら坊主踏み散らす  
校庭の桜と坊主の運動部  
僧坊や露の青芽が厨染める  
絶景の坊門さくら散りしきり  
ふくざつな人間関係葱坊主



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

兵庫 寺坂八重子

鎌倉 畑 佳与

咲くための光あつめて花三分  
駄鈴は万葉の音下萌ゆる

料峭やぐすぐす沈む角砂糖  
古本屋の奥の暗闇花の昼

下萌や日のあはあはと小盆地

初蝶を思はず追ひし手足かな  
梅の香を攫つてゆきし芸妓かな

そのうちと些事をためこむ葱坊主

おもへども飛べない私シヤボン玉

春一番二番三番富士痩せて

諸葛菜空に五寸の色足せり

亀岡 角村摩耶子

アリソナ 伊吹 之博

方言や手漉きの和紙の手ぎはりに

神饌の根芹を洗ふ水ゆたか

木苺や娘の成長に追ひつけず  
花愛でる喜び気づく異邦人

護摩けぶり吉野は春を展べ初めり

旗幟のごと農衣干さるる涅槃西風

良きことに国境は無し春の空  
異国にも父や母居て春の月